

'98 中国女文字調査研究報告

遠藤 織枝

Nūshu, Women's Script, Report on '98

Orie Endo

中国の女文字（現地では「女書」）については、93年から調査と研究を始め、調査を行うとそのつど、本誌、「ことば」（現代日本語研究会）、その他の新聞、雑誌に報告をしてきている。ここでは、98年3月と98年8月に行った調査と、それに基づく研究の一部を報告する。

キーワード：三朝書の古さ、中国女文字の文字数、異体字の考え方、何艶新の文字

1. 中国女文字はいつから存在するか

中国湖南省江永県の女文字を論じるとき、避けて通れないのがその歴史である。しかも、その歴史は、女文字についてかなり多くのことがわかってきている中で、もっともわからない部分である。この文字が、個人のレベルでのコミュニケーション手段であり、公的な文章として使われたことが全くないものであるため、その歴史をたどることが非常に難しく、解明なされないままに一というよりも、解明の手がかりもないままというほうが適当か一きいているのである。

従来、この文字の研究者たちは、その歴史について、いくつかの見解を

発表している。

- ① 甲骨文字に続く、漢字以前の文字とする、謝志民^(注1)ら。
- ② 漢字の楷書以降、宋代以降とする、趙麗明^(注2)ら。
- ③ 明代後半以降とする、李正光^(注3)ら。

①、②は、具体的な資料に基づくものではなく、①は、文字の字形の類似から、②は、宋代に使われ始めた簡略字を真似たと思われる文字があることからの類推である。③は、女文字を書いた三朝書（後述）の紙の質からの推測である。1997年11月、シンポジウムで来日した周碩沂も、その席上で秦代以前のもたと語るなど、その歴史に関する幅は非常に大きい。

1-1 三朝書はいつから存在するか

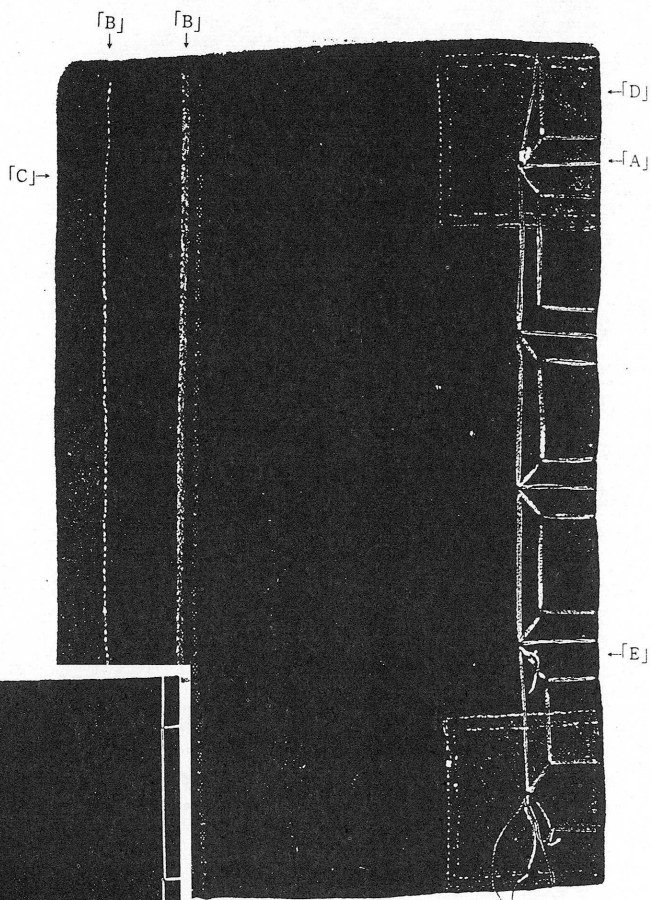
文字自体を眺めても、その歴史を解く手がかりは、②の趙麗明の視点のほかにはなさそうだ。そうなると、文字自体ではなく、その周辺から探るしかない。そこで今回、その歴史を三朝書の古書籍としての観点から考えてみた。つまり現存する三朝書の、書物としての体裁、材質などから、その制作の時代を推測するというものである。

三朝書は、当地の女性たちが結婚するとき、嫁ぐ娘に贈られた冊子で、そこに女文字で、嫁ぐ娘との別れを嘆いたり、嫁ぎ先での振る舞いを説いたり、幸せな結婚を祈ったりする歌が記された。この、三朝書を贈る風習は中国解放以前のもので、1950年代には姿を消している。

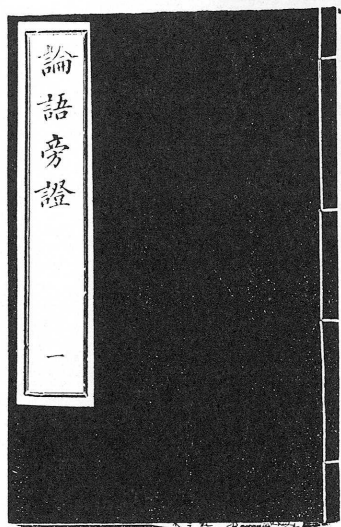
現存するものとしては、最も新しいものでは、5-60年前のものとなる。

三朝書は（資料1）で示すように、黒の布の表紙、その表紙の綴じ方、表紙の布の扱い方、装飾のテープの使い方など、様式が一定している。これらの様式が中国の書籍の装丁の歴史の中でどのような位置を占めるのか、他に類似するものがあるのか、など、中国の古書をみる立場から位置づけたいと考えた。

そこで、中国の古書籍の鑑定の第一人者史樹青（中国歴史博物館研究員・前政治協商委員会委員・国家文物委員会委員）を北京の歴史博物館に訪ねた。



資料 1



資料 2

持参した三朝書を見せると、史は、女文字自身は以前見たことがあるが、三朝書は初めてだと言い、三朝書を手し、なめるように見ていきながら、多くのことを語ってくれた。以下、項目に分けて史の「鑑定」の結果をまとめて記す。

1-1-a 表紙について

1-1-a-① 装丁

これは、とても精密に作られている。技術の水準が高い人の手になるものだ。このような丁寧な綴じ方の書は他に知らない。中国の古書の綴じ方は(資料2)のようなものだ。ふつう、4カ所で綴じる。丁寧なもので6カ所綴じる。しかし、一つの穴に一回糸を通すだけだ。この本の角(資料1のAの部分)は同じ穴に糸が何回も通されている。とても丁寧に丈夫な綴じ方だ。実用的だ。また、芸術性がある。

手先の器用さを人に示そうとしている。中国の農村では、以前は、どこにお利口さんな嫁がいる、どこの嫁は不器用だと、よく言ったから、こうした装丁のしかたで器用さを示したかったのではないか。

表紙に貼られているテープのようなもの(B)。一般の本にこの種の飾りものはつけない。服の袖口などに刺繍飾りや、テープを貼りつけることがある。だから、本にも飾りをつけたのではないか。

表紙は中の紙が傷まないように、丈夫な布が使われている。

表紙の左側四分の一ぐらいのところの布が、バイヤスになっている(C)。これは、表紙を丈夫にするためではないか。

角の赤い四角の布(D)。とても古い。かなりの年月が経っている。

綴じた糸(E)。この切れかたを見ると、いつも、この本を見ていた様子がわかる。

1-1-a-② 布

表紙の布は、2-300年は経っている。

布は、自分で織ったか、小型の工場で簡単な織り機で織ったかどちらか

だ。明の時代から、小さい織物工場はあった。清代には、そういう工場は至る所にあった。表紙の裏に使われたピンクの布、これも 200 年は経っている。このような模様を織り込んだ布も古くからあった。

1-1-b 内部について

1-1-b-① 紙

表紙をめくって最初に赤い紙が使われている。これは、この本がおめでたいときに、やりとりするものだとすることを示している。

紙は、中国南方の紙だ。きめの細かいいい紙だ。南方は紙を多く生産していたから、庶民でも買うことができた。

1-1-b-② 筆記具

竹を削ったものではないか。その先に墨をつけて書いたのではないか。ウイグル族にも、竹を削ったり、鳥の羽毛で筆にしたものがある。

毛筆ではこの文字は書けない。毛筆の文字に見られる、毛の跡が全く見られない。(袋とじになっていて裏はみえないはずだが、たまたま古くて袋の部分が破れていたため、紙の裏が見えた。遠藤注) 裏から見ても、にじんでいない。毛筆だと少しはにじんだ跡が残るものだ。

いい墨を使っている。大工が家を建てるとき、印をつけるためにいい墨を使うが、これも同じような墨ではないか。線が美しい。裏から見てもにじんだ跡がない。

1-1-c 女文字について

女性が、これだけの文字を作り出せることはすばらしいことだ。女性は昔から、学問をしてはいけない社会だったから、自分たちで文字を作って、自分の感情を表せるようにした。これは本当にすばらしいことだ。

解放後、中央政府は文字を統一したいと考えている。他の異形の文字が多いことはいいことと考えない。いろいろの文字を統一したいのだから、女文字の研究も少ない。研究を奨励しないから。國務院はどこの部門にもこの文字を検討項目に入れていない。

中国は、この文字にもっと関心を持たないといけない。中国の義務であ

る。粗末にしてもいけないし、無視してもいけない。

以上、史樹青へのインタビューで得られた回答をまとめた。史の研究室には、日本の古書籍の研究者で、彼のもとに留学して、その鑑定の現場に立ち会いながら、鑑定法を学んでいる人がいた。「この大先生のそばにいて、お声が聞けるだけでしあわせです」と、その日本人研究者は興奮気味に話してくれた。史が76歳の現在でも、現役として数々の文物の鑑定をこなし、その鑑識眼の確かさで博物館の館員たちから尊敬と親愛の目でみられていることは、廊下をすれ違う人々と交わすことばでわかった。文革のとき、その夫人は、あまりに苛酷な追及に耐えきれず自殺してしまったという。その激動と荒波をくぐり、今では中国の「文人」の語そのものであるかのような人物である。この、中国で古書籍鑑定の10指に入るという（北京大学図書館 古籍特蔵部 張玉範教授 談）優れた目の持ち主に、三朝書の鑑定をしてもらうことができたのは、たいへんありがたかった。

もちろん、これで女文字の歴史が解明されたというわけでは、決してない。文字の古さは、史も、判断をくださなかった。女文字を書いた三朝書自身が2-300年は経っているだろうという鑑定を得ただけだが、それで今回の目的は十分達せられた。

少なくとも、2-300年前から女文字が存在した、すなわち、女文字の歴史は2-300年はあることがわかった。100年、200年程度の歴史ではないらしいのである。さらに、前政治協商委員会委員、また、国家文物委員会委員として、中国の文化政策の近いところにいる人物から、女文字に対する、中央政府の見方も聞くことができた。中国政府が重視していないことは、今まで中国の社会科学院の語言研究所、文字工作委員会、婦女聯合会の責任者など、多くの人々に対して行ってきたインタビューでわかっていった。それが、より明確になったのは、よりよい処置を望むものとしては、非常に残念ではあるが、現実である。その現実の上で、次の方策を考える以外にない、という意味で、これも貴重な証言であった。

2. 中国女文字の数と異体字の存在

2-1. 文字の数え方

この、湖南省の南部、江永県の女性たちが、自ら作り、学び、伝えてきた文字の数字については、いままで、数人の研究者によって報告されている。それらの報告の数値は以下のとおりである。

1 宮哲兵 ^(注4)	670 字
2 宮哲兵・趙麗明 ^(注5)	1099 字
3 宮哲兵・趙麗明 ^(注6)	1112 字
4 Chiang William Wei ^(注7)	1535 字
5 周碩沂 ^(注8)	1560 字

このように、同じ地域に伝わる同じ文字を対象にしていながら、1000字近くもの差が出るのは、この文字に多くの異体字が存するからである。

1と3は、同一研究者が1986年と1991年に発表したもので、5年の間に442字も増えている。これは、5年間に採集した文字がそれだけ増えたということではなく、文字の登録の基準を変えたということである。つまり、1では、異体字の採録が、少ないが、3では、異体字を大幅に、それぞれ別の文字として採録しているのである。

ここでまず、杉本つとむ(1978)に依拠して、同一文字と異体字を以下のように定義する。

同じ文字体系の中で、同一の文字としての観念を呼び起こすものを、同一文字とし、その文字に存する幾種類かの変体(バリエント)を異体字と^(注9)いう。

女文字の場合の異体字とは、次のようなものである。「𠂔、𠂕、𠂖、𠂗」や「𠂘、𠂙、𠂚、𠂛」のグループの中に見られるもので、このグループのなかに、基準となる文字と、それぞれの変体が存することになる。

2-2. 異体字の発生の理由

このように、異体字が多く存するのは、女文字自身の習得過程の特徴にある。この文字を教育学習するのは、すべて個人のレベルであり、公的機関が介入することはなかった。

まず、習いたい娘がいて、教えることのできる女性がいるところが、教室になる。教える側に文字指導のためのテキストはない。教える女性自身も私的レベルで教わる。教える人によって差が出てくるのは当然である。差異のなかには、文字数・字形・用法などが含まれる。

個人個人の筆記による文字だから、当然、上手・下手もあるし、筆癖・書き癖の差がでる。平仮名で考えてみると、「さ」を「𠂔」と書き、「や」を「𠂘」と書くなど同じ字が異体になるようなものだ。「そ」でも、「𠂚」と書く人もいるのと同じことだ。

娘たちの住む村も徒歩で30分、1時間以上離れた村々である。同じ村内のような統一的な伝わり方は期待できない。

教える人も、義理の姉妹・母親・姉妹・叔母・伯母など、だれになるかわからない。だれかが書いたものが手本になるわけだが、その手本も個人差がある。そのように整理されない状態のものを、手本として習ううちに、変体生まれるのは当然のなりゆきであろう。画数に差が出たり、折れ曲がった線が、直線から、曲線になったりすることはおおいにある。漢字を書くときのことを想起すればすぐわかる。手で書けば「糸」と「𠂔」、「母」と「𠂗」は、画数は違うが、それぞれ同じ漢字と認識されている。

「女」と「𠂗」のように、他の線と交わってそこで留まっているか、突き出ているかに形の違いを見ることはできるが、同一の文字であろう。小さく書くと、点か丸かの区別もなくなる。はねる線が丸いのもあれば、短いものもある。

また、教える人の性格にも左右されるようだ。97年夏の現地調査の際、伝承者の1人何艶新に尋ねたとき、彼女は答えた。「先生によって、とても厳しい人とそうでない人がいて、厳しくない人は、だいたい形が合っていればいいと言った。」

学校でも塾でもないところで、教えたり教わったりするのだから、それほど、厳密な正確さは要求されなかったと考えるのが自然であろう。読んで（読めて）意味が通じる、さらに、つまるところは、それを眺めて歌が歌えればよかったのではないか。

2-3. 異体字の扱い

このような、規範性の薄い、非常に個人性の強い文字であるから、異体字が多く生まれるのは当然であり、その結果、文字の数を数えるのに、混乱が生まれるのである。

さて、上記の5種の報告中の異体字の扱いはどうなっているか。

1以外は、異体字をそれぞれ別の文字として登録する方法を採っている。1も、同一の研究者が2、3で、異体字を別にする方法に改めたのであるから、これらの報告はどれも異体字を別にしている、と考えられる。つまり、中国女文字の文字数は、1099から1560あるということになる。

わたしは、おそらく最後の伝承者となるであろう、何艶新の文字のリストを作りたいと考えている。まず、何が書ける文字はいくつあるかを知る必要がある。その際、どのような数え方をすれば、また、どのように整理すれば、この文字の実情にあっているかを考えなければならない。幸い、何には、会って確かめることができるので、異体字があっても、本人が、意図的に使い分けをしたのか、うっかり間違えてしまったのかを聞き出すことができる。そうして、従来の研究者の数え方を参照しながら、何に対して聞き取り調査をしているうち、いくつかの矛盾に気がついた。

何艶新がいままで書いたものを基にその文字数を調べていると、何が同じことばを書くのに、同じ作品の中でも少し字体の違う文字を書いている

るのに出会う。ここで、字体が違うとは、たとえば、「𠄎」と「𠄏」、「𠄐」と「𠄑」のように、点の数が一致しないのや、「𠄒」と「𠄓」のように線の交差の有無などである。これらについて、文字として区別があるのかと尋ねると、何はないという。どちらでもいいのだという。何が教わったのは、どちらでもよかったが、ほかの先生だったら、区別があったのかもしれない。もう1人の伝承者陽煥宜に、彼女が同じ歌の中で書いた「𠄔」と「𠄕」について、確かめたときも、どちらでもいいと言っていた。

このように、規範性の薄い文字を、厳密に1点1画違うごとに別の文字として考えたら、どんどん数が増えていってしまう。同一の観念をもつものは同一文字として整理し、その字形の不一致は異体字として処理するのが、この文字の実際と合っているといえよう。

2-4. 既存リストの矛盾

1995年9月の現地調査の際、2と3のリストを作った趙麗明に、そのリストの作り方を尋ねたところでは、集めた資料をコピーして、1文字ずつに切り分けて、違うものを別にして整理したといていた。その結果できたリスト3の最後のページを以下に示す。(資料3)

このリストでア、カ、ケは「鳳」の音を表す同一の文字と、その異体字であると考えられる。同様にイ、コ、スは「漸」の、ウ、キは「福」の、エ、サ、シは「谷」の、オ、クは「落」の音を表すそれぞれ同一の文字と、その異体字であると考えられる。このように、文字の形が違うものをすべて別の文字として登録した結果、このリストでは、1112文字が採録されているのである。

一方で、このリストには、(資料4)のように、()内に異体字として並べている箇所もある。しかし、(資料3)のページでは、それは行われていない。このような、異体字の扱いの違いになにか意味があるのかを尋ねたら、特に違いはないと言う。

そのほかにも、このリストには、矛盾がある。たとえば、(資料5)のA、B、Cの「𠄖」と「𠄗」の扱いである。Aは7画、Bは9画、Cは10

mai³¹ 窰
 窰 n'ai³¹ 襖窰
 窰 6ie³¹ 興勝
 窰 kei³³ 高糕膏
 窰 təŋ⁵¹ 甜填電
 窰 t6yəŋ³³ 捐磚娟專

【十四畫】

ア 窰 faŋ³³ 鳳
 窰 tshai³³ 親友
 窰 tsi⁵¹ 辭池
 窰 tshai³³ 親
 窰 tsei³³ 操

イ 窰 ŋa³¹ 眼
 窰 t6yəŋ⁵¹ 漸
 ウ 窰 fu⁵⁵ 福復
 エ 窰 ku⁵⁵ 谷
 窰 kaŋ⁵⁵ 管
 才 窰 tsie³³ 贈
 窰 la³³ 落
 窰 tsei⁵¹ 拙
 窰 mei⁵¹ 問們民
 カ 窰 faŋ³³ 鳳

【十五畫】

キ 窰 fu⁵⁵ 福復
 窰 mou⁵¹ 謀
 窰 fuə³³ 畫夏話會

ク 窰 la³³ 落
 窰 xəw³³ 害

【十六畫】

ケ 窰 faŋ³³ 鳳
 窰 t6yəŋ⁵¹ 漸轉
 サ 窰 ku⁵⁵ 谷鴿

【十七畫】

シ 窰 ku⁵⁵ 鴿

【二十畫】

ス 窰 t6yəŋ⁵¹ 漸

tshai ⁵¹ 齊	√ ɕiɑŋ ³⁴ 上	ʌ xei ³⁵ 好
セ ㄨ niu ³¹ 女(ㄨ ㄨ)	ㄩ tɕiɑu ³⁵ 九久	khau ³⁵ 口
ソ ㄌ tɕiɑŋ ³¹ 見(ㄨ ㄨ)	ɕiɑu ³⁵ 守手首朽	ㄨ tai ³¹ 第
ㄨ thɑŋ ³³ 天添	lei ³⁵ 等	lai ³¹ 了
ㄨ pu ³⁵ 卜甫普	ㄨ ㄌ kau ³³ 朝低	ㄨ ㄌ ㄌ kau ³³ 知(ㄨ ㄨ)
ㄨ kə ³⁵ 蛙	(tɕi ³³) (ㄨ ㄨ ㄨ)	ㄨ khɑŋ ³¹ 看(ㄨ ㄨ)
ㄨ liɑŋ ³³ 丁釘	ㄨ ɕya ³⁵ 水	ㄨ tɕi ³⁵ 幾(ㄨ ㄨ)
【三畫】	ㄨ sai ³¹ 小細笑	ㄨ tɕi ³⁵ 幾(ㄨ ㄨ)
ㄨ sog ³³ 三	siau ⁵⁵ 息	ㄨ tɕi ³⁵ 幾(ㄨ ㄨ)
ㄨ uei ⁵¹ 文(ㄨ)	↑ kau ³¹ 个	ㄨ tɕi ³⁵ 幾(ㄨ ㄨ)
	kau ⁵⁵ 各	ㄨ tɕi ³⁵ 幾(ㄨ ㄨ)
	tsai ³³ 節	ㄨ tɕi ³⁵ 幾(ㄨ ㄨ)
		ㄨ sa ³³ 山(ㄨ)

資料 4







画の文字として、それぞれの画数のところに採録されている。

画数の数え方として、曲線は一画で、折れ曲がった線は 2 画とされているので、その方式で数えると、A では「ㄨ」が 2 画となり、B では「ㄨ」が 3 画となるので、A が 7 画、B が 9 画の文字として、それぞれの画数のところに配置されるのは理解できる。ところが、C がなぜ 10 画のところに配置されているのかが理解できない。B の 2 文字とどこが違うのだろうか。音韻記号の声調の数字が B と C とでわずかに差があるが、これは、文字の配置場所を別にする理由にはならない。


また、A で、異体字とする () の扱いも不徹底である。A の異体字を () に示すなら、B でもそれをすべきであろう。



なにより、わかりにくいのは、それぞれの女文字を翻字した漢字のずれである。A では、「ㄨ」が、「坐、做、嫂」の 3 字に相当するとされるが、B では、「ㄨ」が「嫂」「死、傘、省」に、「ㄨ」が「做、坐」に区別して記される。C は、漢字の当て方では B と一致している。



A の異体字の指示に従えば、「坐」のときだけ「ㄨ」「ㄨ」どちらも使

A (p,328)		tsɑ ³¹	坐()
		tsəu ³¹	做
		sei ³⁵	嫂
B (p,324)		sei ³⁵	嫂
		sɑ ³⁵	死 <small>半省</small>
		tsəu ³¹	做
		tsɑ ³¹	坐
C (p,319)		sei ³⁵	嫂
		tsɑ ³¹	坐

資料5

うことになり、それに合わせれば、Bの「」にも「坐」があてられるはずだが、それはなされていない。

「」「」は、リスト3の中で、それぞれ3箇所採録されていて、それぞれ別の3種の文字、つまり6種の文字ということになるが、Aから考えてみると同一の文字、Bから考えると別の2文字となる。いずれにしても、6種の文字とはならない。

ここで、別の文字か、異体字かについては段階を設けて考える必要がある。すなわち、最後の伝承者と思われる何は、どちらも使うが、使い分けはしていないから、異体字となり、より以前の、人によって、「」は「做、坐」、「」は「嫂」に、と厳密に使い分けをしていた場合は別の文字というように。つまり、時を経て、その区別があいまいになった、と考えられるのである。

次に、5のリストの作成者周碩沂のリストの最後のページを掲げる(資料6)。ここでも、1522、1523、1553が「害」の、それぞれの1536、1560

が「鳳」の、1551、1563、1569が「谷」の、それぞれの音を表す文字の異体字であると考えられる。周は、筆者が違う場合と、文字が別のものである場合とがあると言っていたが、これらの例も杉本の言う変体であろう。

1500	1501	1502	1503	1504	1505	1506	1507	1508	1509	1510	1511	1512	1513	1514	1515	
𪛗	𪛘	𪛙	𪛚	𪛛	𪛜	𪛝	𪛞	𪛟	𪛠	𪛡	𪛢	𪛣	𪛤	𪛥	𪛦	
1516	1517	1518	1519	1520	1521	1522	1523	1524	1525	1526	1527	1528	十四画		1529	
𪛧	𪛨	𪛩	𪛪	𪛫	𪛬	𪛭	𪛮	𪛯	𪛰	𪛱	𪛲	𪛳	𪛴	𪛵	𪛶	
1530	1531	1532	1533	1534	1535	1536	1537	1538	1539	1540	1541	1542	1543	1544	1545	
𪛷	𪛸	𪛹	𪛺	𪛻	𪛼	𪛽	𪛾	𪛿	𪜀	𪜁	𪜂	𪜃	𪜄	𪜅	𪜆	
1546	十五画		1547	1548	1549	1550	1551	1552	1553	1554	1555	十六画		1556	1557	1558
𪜇	𪜈	𪜉	𪜊	𪜋	𪜌	𪜍	𪜎	𪜏	𪜐	𪜑	𪜒	𪜓	𪜔	𪜕	𪜖	𪜗
1559	1560	1561	1562	1563	1564	1565	1566	十七画		1567	1568	1569	1570			
𪜘	𪜙	𪜚	𪜛	𪜜	𪜝	𪜞	𪜟	𪜠	𪜡	𪜢	𪜣	𪜤	𪜥	𪜦	𪜧	𪜨

資料6

周のように、少しでも字形の異なるものは別の文字として、採録するのは、数を増やすだけで、女文字の実情から離れることにならないか。バリエーションがあることは当然記録しなければいけないが、文字の種類を記録するのと、バリエーションを記録するのとでは異なるレベルと考えるべきであろう。








2-5. リストの文字の配列

次にリストの作り方が問題になる。採集し、整理した文字をどのように配列するか、である。

上記リストは、1、2は画数順と音韻順、3は画数順、4は音韻順、5は画数順に配列し、別のページに、その文字の表す音を示している。

文字リストを作る際、画数順というのは、まず考えることである。それと、女文字は一種の表音文字であるから、音韻順のリストは必要である









う。だから、今までの報告も4以外はみな画数順のリストを作っている。4は英文で発表されているので、漢字と直結した画数順の必要性を感じなかったのであろう。

わたしも、当初、画数で整理してみた。画の数え方を、漢字に準じて行い、漢字にない曲線や丸「○」についての、基準を設けて数えていけば、客観的に数値を出すことができる。しかし、画数で並べると見えなくなる部分がある。異体字が別々の画数のところに配置されるので、異体字であることが隠されてしまう。最初にあげた 、、、 は、同じ「te in」^(注10) という音の文字であるのに、 は3画、 は4画、 は5画と、それぞれ別のところに登録されてしまう。このような配列では、異体字が非常に多いこの文字の特性を示すことができなくなる。

そこで、わたしは、それぞれの文字のかたちの特徴から、共通な形のものでまとめる方法を考えている。女文字には、「𠃉」「𠃊」「𠃋」のように、造字成分ともいえるもので組み合わせられているものが多い。この造字成分ごとにまとめていく方法である。造字成分が複数ある文字は複数の成分のところに、登録するが、数に入れるのは、最初の造字成分に収められたものだけにして重複を避ける。異体字は（ ）で示す。

現在、これらの文字の現地の方言の音韻を調査している段階で、まだ、

文字リスト案

造字成分	音韻	声調	該当する漢字
文字 	te'yə	1	尺
	te'yn	↓	勸、串
	liou	↓	留、劉、柳、流
	lie	↓	对、確、隊
	nin	↓	言
	tei	↓	寄
	si	↓	() 送、信、宋

全部は示すことができないが、(資料7) のようなリストの構想で整理している最中である。これと、音韻順に並べたものを作って、何艶新氏の女文字リストを完成させる予定である。

〈注〉

1. 「江永“女書”之謎」謝志民(河南人民出版社 1991)
2. 「奇特的女書」趙麗明編(北京語言学院出版社 1994)
3. 「中国の女文字—伝承する中国女性」遠藤織枝(三一書房 1996)
4. 「婦女文字和瑤族千家洞」宮哲兵主編(中国展望出版社 1986)
5. 「女書—一箇驚人的發現」趙麗明・宮哲兵(華中師範大学出版社 1990)
6. 「女書—世界唯一的女性文字」宮哲兵編(台湾 婦女新知基金会 1991)
7. We two know. Chiang William Wei (Yale Univ. 1991)
8. 「永明女書」周碩沂・楊仁里・陳其光(岳麓書社 1995)
9. 「異体字とは何か」杉本つとむ(桜楓社 1978)
10. 声調の表し方の一種。7声ある当該方言の声調を記すために、黄雪貞(共同研究者・中国社会科学院語言研究所研究員)が採用している方法。

(文中敬称略)

本研究は平成10年度科学研究費補助金「国際学術研究」によるものである。